

monthly JODO

2011

10

October



結 燃 上 入 を 歩 く

二十五霊場二十一番

京都大原勝林院

◆御詠歌◆

あみたぶ
阿弥陀仏に
そ 染むる心の
いろ 色に出でば
秋の梢の
たぐいならまし

阿弥陀さまの本願を深く信じ頼む心は、常々にお護り・お育てを蒙り、その御心が深く染み入り、日を追うごとに私たちのお念仏の暮らしに現れてきます。秋の深まりにより、一段と燃え立つような深い紅の色に染められていく梢のようです。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次朗

浄土

2011/10月号 目次

いのちの無常と来世への希望②	梶村 昇	2
会いたい人 加藤健一さん③	関 容子	14
響流十方	袖山榮輝	22
快僧渡辺海旭	前田和男	26
法然上人を歩く	高橋良和	32
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネツ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙裏・法然上人を歩く+表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く京都大原勝林院



表紙題字=中村康隆前浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

いのちの
無常と
来世への
希望

2

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人鑽仰会
公開講演会

概録

科学的、世俗的、宗教的

私はお釈迦様の悟りを縁起としました。縁起の理です。縁起の理のうち、最初の科学的なこと、これは原因があれば結果があるということで、自然科学では明らかになることです。

しかし、精神科学になると、もうだんだんその確率が悪くなります。そして人間そのものの研究、これが宗教ですが、これはほとんど確率がまずいわけです。

私は、仮に三つに分けてみました。一つは「科学的対応」、原因が明らかになって結果が明らかになるもの。二つ目は原因がある程度わかるけれども、結果がなかなか出ないもの、それを「世俗的対応」としました。だから理性的な生き方です。今、私たちがやっているのは、ほとんどここのことです。理性的に生きていくわけです。何とか理性を働かせて、そしてこの世をうまくやっていくということです。

そして三番目が「宗教的対応」ということです。この宗教的世界というのは、いくら理性を働かせても、入れない世界です。そこには大きな、例えてみれば、大きな山があるのです。この山を乗り越えないと、宗教的世界に入れないのです。

あまがす たらう だつて
甘粕太郎忠綱という武士が鎌倉時代にいました。この武士が法然上人を訪ねたのです。武士ですから、戦いで相手を殺さなければいけない。これを悪人といいます。罪人です。何人もの人を殺めた（あや）そういう者が救われるだろうか、法然上人に尋ねたのです。

そうすると法然上人は、「阿弥陀仏はそういう罪人こそを救おうとしていらっしゃるの

だ」とおっしゃった。だから「南無阿弥陀仏と阿弥陀様に帰依すれば救われるのだ」とおっしゃる。そうすると、「いやわかった」と言っ、て、そうして戦争にまた行ったという話があります。

そうすると、そのとき法然上人がおっしゃられたのは、これは本願の不思議だということです。南無阿弥陀仏と申せば救われる。これは理性的世界で考えたら、いくら考えたって救われるわけではない。

ところが、宗教的世界に入ると、それが救われるのです。だから、法然上人になぜかと聞くと、「それは本願の不思議なり」という、本願の不思議ということは、ものの理性的に、ものを思い図っても分からない。思議できない、それを不思議ということです。

南無阿弥陀仏と申して救われる。極楽に往生できる。これはいくら理性で考えてもわからないです。

哲学というのは、あくまでも理性で考えようとするものです。ですから、これに対する哲学の答えはなにかというと、難問ということです。難しい問題を難問というでしょ、あのことです。

それを哲学者はアポリアなんてギリシャ語で言っているのです。アポリアということは、訳すと「難問」ということです。

南無阿弥陀仏と申せば救われる、それはなぜか。哲学でいうと、それは難問で答えが出ないということです。難問、アポリアというのは、難しいということと同時に、道がないと訳すのです。ギリシャ語でそういう意味です。

だから、南無阿弥陀仏と申せば極楽に行けると、法然上人はおっしゃる。それは宗教的

世界。すなわち大きな山を越えた、山の向こうの世界。こちらの世俗の世界は理性を振り回しているのですから、いくら考えてもわからない。だから、これは難問なのです、アポリアなのです。道がないのです。

今私たちはほとんど、道がない世界で生きているわけです。どうしたらその山を越えるか。

一番目は科学的でなければならない。それは理性の世界ですから、科学的でなければならないのです。

その次、これは私も非常に尊敬する評論家なのですが、小林秀雄という人が「生と死」という講演をした、それが「感想」という本の中に載っている。その中の一部です。

「よく生きる事は、よく死ぬ事だろう。私たちの心とか命とか呼ばれているものの在るがままの姿を、知性で捕らえようとすれば、そんな風な言い方をするより他はない」という。私がこれを引用した理由は、「知性で捕らえようとすれば」というところです。もう我々はいずれ死にます。お互い死ぬということ、どのように死ねばいいかというと、「よく生きることだと」それ以外に道がないのだと小林さんは言うのです。

これが、「知性で捕らえようとすれば、そんな風な言い方をするしかないのだ」という。確かにそうです。

よく生きること、精一杯生きること。そうすると、それがよく死ぬことだと思うのです。理性的に捕らえれば、そうとしか言いようがないのです。よく生きることです。

俳句の金子兜太さん。九十一歳です。四年前に奥様を亡くされたそうです。そのあとの句です。

「今を生きて老いを思はず去年今年」

今を生きている。今を生き一所懸命生きるのだと、そして、自分は九十一になったな、そんな老いを思わず去年今年生きてきた。妻を亡くして、去年今年。

今を生きて、今を生きるのだと、それが、私はこの理性的な生き方の最もよい、理性で考えられる最もよい生き方ではないかと思うのです。よく生きることが、よく死ぬことだという。

だから、平然と死を、ああよく生きたと思って死を迎える、それは、よく生きる場合、そうなるということです。理性的で考えればこうとしか言えないのじゃないでしょうか。

「今を生きて老いを思はず去年今年」です。

この理性的生き方に対して、今度は宗教的生き方。すなわち大きな山を越えた先の生き方なのです。それには、山を越さなければならぬ。

そこで、先ほどのお釈迦様の悟り、縁起ということを考えてみた。お釈迦様はそれをどうおっしゃったか。これが恐らく、お釈迦様の悟り以来の最初の教義です。これが四つありますから、四法印しほういん、一つ抜かして、三法印という方もありますが、四法印とします。

四法印

一つは「一切皆苦」。すべてのものは苦だということです。生きるも苦、年を老いるも苦、病になるのも苦、死ぬのも苦。会いたくない人に会う。会わなければならぬ。これも苦。別れたくない人とも別れなければならぬ、これも苦。全部思うとおりに何もかもいかな

い、これも苦。そして人間の体っていうのは苦だと。これを四苦八苦と言います。人間は四苦八苦して、生きているのです。全部苦なのです。

しかし、この世をもっと楽しく生きようじゃないか。という人もいます。「どうぞ」と私は言うのです。何も苦しくない人に苦しめなんていうことは一つも要らないのです。苦しくない人はどうぞ楽しんでください。一生、死ぬまで楽しみなさい、その代わりというのです。

仏教は、悲しみに苦しみに、ああと思ったときに仏さんが手を出してくれます。楽しくてしょうがない人に、仏様は要らないのです。どうぞ楽しんでください。しかし、必ず苦は来るのです。それが一切皆苦です。

その次が「諸行無常」。あらゆるものは、無常だということです。無定は常住ではないということです。常住というのは、いつも変わらないということです。人間は刻々と変化しているのに、それを思わないのです。

一時間前の自分と、今の自分と同じ自分だと思っていraftしやいますか。一時間前より、確実に一時間年をとっているのです。一時間前と今の自分が同じなんてことは科学的にあり得ないです。刻々と変わるのです。人間の細胞というのは三分間で全部変わるそうです。一回りぐるっと変わるそうです。だから刻々と変化している。それが常住ではないということです。

あらゆるもの、諸行、サンスクリット語を直訳しますと、つくられたるもので、変わらないものはないということです。それを中国の人が諸行無常という漢字で訳した。それが日本に来て『平家物語』に使われて、非常に一般的に「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響

きあり」というので、何となく、さみしいなという感じがするのです。

その次が「諸法無我」。諸法というのも、これも「あらゆる」ものです。「我」というのは、「常一主宰」といいます。いつも変わらずに単独で、つかさどっているもの、それが我なのです。

いいですか。いつも単独です。単独で、というのは相手との関係なくということです。相手との関係なく単独で、そしてこの自分というものをつかさどっている、そういうものはないということです。それが無我です。

あらゆるものはこちらが変われば、そちらも変わる。私が変われば、そちらも変わるということです。

その次が「涅槃寂静」です。涅槃はサンスクリット語でニルヴァーナということです。ニルヴァーナというのは吹き消すということで、ろうそくの火をふっと吹き消すという意味です。

私たちは常に、煩惱の炎が燃えていると仮定するのです。そうですね、いろいろな炎が燃えているのです。そういうものをふっと吹き消す。それが涅槃。そして寂静、静かな、静かな生活に入る。それが仏教だということです。

これを四法印というのは、四つあるから四ですけれども、法というのは教え、印というのは旗印という意味です。だからこれは仏教の四つの旗印なのです。

仏教にも旗印が必要なのです。仏教というのは、私は不思議な教えだと思うのです。キリスト教はバイブルで、イエス様、神様のおっしゃったことがもう絶対信条でしょ。だから、キリスト教は旧約聖書、新約聖書の中の言葉がすべてです。

ところが、仏教というのは不思議な宗教でして、次から次に増えるのです。だからしまいに八万四千の法門がある。八万四千というのは、無数という意味です。無数の教えがあるという。まだこれからも増えるのです。これを一番最初におかしいと言った人は、日本人なのです、世界で。徳川時代の、江戸時代の中ごろに、富永仲基というこれは町人なのですが、『出定後語』という本を書かれた。

そして、こう言ったのです。仏教というのは、次から次に説ができる、架上の説だということです。次から次に加わったもので、だから大乘仏教なんていうのは、これはお釈迦様が亡くなって五百年後に生まれているのですから、これは釈尊の教えではない、非仏説、大乘仏教非仏説論という、そういうのを徳川時代に学者がそういう批判の本を出したのです。

しかし、富永仲基は、一ヶ所間違っています。なぜかというと、確かに仏教は次から次に加わった説です。ただし、全部お釈迦様の教えに則って加わっているのです。そこを忘れてから大乘仏教は仏説ではないなんていう、非仏説論などという。そうすると、人間というのは、そういう理論的に言われるようになるほどと思うもので、みんなそう思っている。

それで随分、その仲基の話が流行ったのです。のちに平田篤胤なんか、それを利用してやったのが、廃仏毀釈につながるのですけれども、それは今は別として、確かに富永仲基が言ったように、仏説というのは次から次に加わるものです。

加わるものだけでも、それは釈尊の精神に則って加わったのですが、釈尊の精神に則らずに加わったのもあるのです。が、そういうものは、自然淘汰でなくなっていくのです。

それが不思議なのです。

釈尊の教えに則らない、則ってつくったつもりでいるけれども、則っていなかったものは消滅していく。

私は昔アメリカに留学させてもらったときに、鈴木大拙先生が英語で禅の話をして、全世界に仏教を広めた偉大なる人ですが、九十四歳で亡くなられましたけれども、鈴木大拙先生がアメリカでお説教しているのを聞いたことがあります。

そうしたら、鈴木先生がこうおっしゃるのです。「いやあキリスト教でもイスラム教でもないですよ。それで救われたものはみんなそれは仏教です」っておっしゃる。聴衆は笑いながら聞いていました。それは鈴木先生だから、そう言えるのです。鈴木先生らしい、鈴木大拙先生らしい教えなのです。

キリスト教でもイスラム教でもいい。それで救われたものはみんな仏教だということです。だから八万四千なんて法門、キリスト教もその中の一つに入ってしまったのです。そういうもののなのです。

そういうふうには、仏教というのはどこまでも広がっていくものですから、ここに、旗印が必要です、それが先ほど申し上げた四法印なのです。

もう一度申しますと、一切皆苦。すべての生きるものを苦しいと思う。

私の尊敬する詩人がこう謳っています。

「生きることを悲しと思うは 生きることを正しとおもうゆえとこそ知れ」と生きること
を悲しいと思う人は、正しく生きているのだと、そう思ってくださいという、そういう短歌です。非常に理屈ばい歌ですけれども、好きな言葉です。

やっぱり生きることを悲しと思う、だから悲しと思わない人は、どうぞ遊んでくださいというしかない。

諸行無常。あらゆるものは刻々と変化していく。永遠に変わらないなんてものはない。結婚式でよく、永遠に変わらぬ愛を誓うでしょ。ところが、翌年離婚してます。そんなことはいっぱいある。特に俳優さん何かがね、永遠の愛を誓って四年後に離婚したなんていう話をしょっちゅうやっています。愛の無常という。

亀井勝一郎という評論家がいらっしゃった。あの人が「愛の無常」という評論を書いていますけれども、永遠の愛を誓っても、愛は無常なのです。何とさみしいと思う。だから、愛が壊れないように努力をするしかないのです。愛なんていうのは、永久にちゃんとして、大事に保管してくれているものじゃないのです。みんなで積み上げなければならぬのです。

そして諸法無我。あらゆるものは、常住ではなく、変化しないものはない。単一で存在しているものはない。みんな相手があるから、自分があるのだと。そして、静かな生活に入る。それが仏教だということです。これが、仏教の四つの旗印だということです。

そこで、僕はこれが、先ほど、一番先に言いました、釈尊の悟りというのは、縁起の理を悟ったのだと。すべて縁によって起こっているのだと。そして、今の科学は、それを跡付けようとして、一生懸命やっている。だから事実跡付けて、立派な成果を上げたものもある。天文学、物理学、科学、建築学、あらゆるものは、もう自然科学のものは原因を明らかにし、結果を明らかにしている。

しかし、まだ原因も明らかにならず、結果も明らかにならない世界がある。今の科学は

それを一所懸命追っている。けれども、いくら追っても人生のすべてを追いきるものではない。ありません。ですから、科学がどんなに発達しても、宗教がなくなることはないのです。

なぜならば、科学はあらゆるものの原因を探るなどということは不可能だからです。それでは、私たちはこの人生をどう生きればいいのかということを示してくれたものが、この四法印だと思うのです。だからこの、四法印というのはお釈迦様の示された科学、人生に対する科学なのです。

そこで、この世界に私たちは入ればいいのです。それが宗教なのです。

(つづく)

行動する仏教

阿満利磨 著

すべての衆生を
救うために



ちくま学芸文庫 定価(本体価格1000円+税)

日本もまた、二〇一一年三月十一日をもって、放射能汚染を日常として暮らす道に突入した。私たちも十万年単位の運動に取り組まねばならない。運動には「絶望」がつきものだが、そのような「絶望」を吹き飛ばす持続力や忍耐力がなければ、私たちに未来はない。——中略——とりわけ「凡夫」の仏教が「末世」のただ中から生れてきたことに注目したい。なぜなら「凡夫」の仏教は、「絶望」に代わる「希望」になるはずだから。

(「はじめに」より)

連載

会いたい人 関 容子

加藤健

さん

③

撮影/タカオカ邦彦

今回、三度目のインタビューに、私の若い友人、仏文翻訳家の徳山素子さんを同伴した。映画『麻雀放浪記』の女術^{ゼン}の辰を演じた加藤さんにすっかり魅了されて以来、本多劇場での芝居も観るようになったという。

「あれは和田誠さんの初監督作品ですね。和田さんは昔、つかこうへいさんの芝居のポスターを描いていらしたんで、舞台を観てくださったんじゃないですかね。それで呼んでくださったって、でも僕は麻雀やったことなくて、と言ったらすぐワンセット送ってきて、牌を一行に並べた上にもう一行をスツと乗せられるように、それだけ練習してください、と言われました。真田広之さんと鹿賀丈史さんと高品格さんと僕の四人が同時にガチャン、と牌が揃うのを上から撮りたかったんでしょね。毎日コタツを出して、そればかり練習しました。今見ると、加賀まり子さんも大竹しのぶさんもそれから僕も（笑）、みんな初々しいですね」

加藤さんは情理を程よくわきまえて、胆の座った寡黙な男を好演した。着流しの姿が粹で、男っぽくて、色っぽくて……素子さんに言わせれば「結局あの映画の中で一番いい役で、しびれる」そうだ。

「ハハハ、どうも。しかし松坂慶子さんの恋人役で共演した『椿姫』のほうがもっと恰好いいはずなんですけどね。ほかに映画では、野村芳太郎監督が気に入ってくださったって、芝居やってると金ないんだろうからチヨコツと出ろ、とおっしゃって『八ツ墓村』『砂の器』『八甲田山死の彷徨』とかに出て、高額ギャラをくださったんで、それを僕の演劇にすぎこんで、助かりました」

『椿姫』では、アルフレードのように「乾杯の歌」を歌ったのだろうか。

「松坂さんはクラシックを勉強してちゃんと歌って、上手でしたよ。僕はそのころまだ歌まで手が回りませんでした。十年ほど前に『詩人の恋』（ジョン・マランズ）をやろうと



1982年、「寿歌」での加藤さん。

決めたときに初めてヴォイストレーナーについて半年間くらい勉強してから舞台に立ちました。とにかくシューマンの『詩人の恋』全十六曲を、相手役と二人でだいたい歌うんですからね。ドイツ語の早口言葉みたいな曲もあって、テープをゆっくり何度も回してやっと聞き取ったり、大変な苦勞をしました」

再演を重ねるこの『詩人の恋』を最初に観たとき、ピアノを弾きながら歌う加藤さんの老教授の深々としたバリトンの美声にびっくりしたおぼえがある。歌ってしゃべって、これが連日なのだから、よほど強靱な声帯の持ち主なのだろう。

「いやあ、つかさんの芝居のとき、スピーカーでガンガン音量を上げていって、それに負けないように大声を出す、という苛酷なのがあって、あるときヒューズが飛んだみたいに突然声が出なくなることがありました。声帯がピタッとくっついて震えなくなっただけでしょうね。それ以来耳鼻咽喉科のおつきあいは欠

かせませんが、役者はオペラ歌手ほど大事に扱ってもらえなくて、いつも二の次です(笑)」

つかこうへいの芝居には通底音のようになってしまうサディスティックなものが流れていると思う。私が思い出すたびに胸の痛むつか芝居は、岸田今日子主演の『今日子』。稽古場での辛い話を度々今日子さんから聞かされたが、それは仕方がないとして、舞台に現れた大ベラン女優は腰高の際どい網タイツ姿で、男に靴を舐めろと言われて舐めに行く場面は、とても正視できなかった。

でもこのことについて、加藤さんの意見は求めなかった。

「音楽は、あの、どういふのが好きですか？」

素子さんが蚊の鳴くような声で訊いた。

「CDは一杯持ってますけど、次の芝居のために買うのでバラバラです。たとえば物売りの声とかね。でも好んで聴くのは、ウラジミ

ール・ヴィソツキーというロシアの詩人で、俳優で、シンガーソングライターの歌です。いつも怒ってるような抵抗ソングですね。『奴らは戦場から戻らなかった』とか『オオカミ狩り』とか。ガラガラのしゃがれ声でギターの弾き語りをするんだけど、それがチャームिंगな声なんです」

ヴィソツキー（1938～1980）は、四十二歳で夭折し、ジョン・レノンや尾崎豊に通じる人気がある。映画『ホワイトナイツ白夜』でバリシニコフが演じた亡命ロシア人バレエダンサーが、最後に踊る美しい名場面のバックに流れたあの歌がヴィソツキーだったことを今回私は初めて知った。

「日本にも新井英一さんという、やつぱりそういう声の歌手がいて、彼のことでも好きなんです。ヴィソツキーの『オオカミ狩り』も彼が歌ってますしね。大ヒットしたのは『清河への道』48番』で、全部聴くと二十五分くらいかかるんです。子供のころ福岡で在日とし

ていじめられながら育って、岩国の米軍キャンプで働いたりして渡米して、帰国後内田裕也さんに出会されるわけですけど、韓国の父親を訪ねてチョンハーへ行って、役所で父親の名前が見つかって……というすごくいい歌なんです」

なるほど、一人芝居に通じる物語り的な歌なのが、いかにも加藤さんの好みらしい。ここ質問をしてくれた。

ところでつい先日のこと。加藤さんのレパートリー、『詩人の恋』や『コラボレーション』など、何本も翻訳している小田島恒志さんにある劇場でお会いしたので、加藤さんについて伺ってみました。

「そうね、僕が言ったと言ってくれてかまいませんけど、彼は本読みのときは誰よりも下手で（笑）、本番になると誰よりもうまいんですよ」

加藤さんが笑って言う。

「それは昔、せりふ憶えに自信があったころ

の話で、稽古初日が本当の初日でしたから準備万端じゃなかったからですよ。今はもうそれでは間に合わないので、稽古初日の前になり読みこんで行きますから、誰よりも下手ということはないはずです（笑）

役者が必ず見る怖い夢というのは、舞台でせりふに詰まって、頭が真っ白になるというものだ、と何人もの方から聞いた気がする。

「近ごろ特に憶えられないのは、イメージにない外国の言葉なんです。『コラボレーション』のリヒャルト・シュトラウスのときはいっぱいあって、見たことのない料理の長い名前、行ったことのない複雑な駅名とかね。それを丸暗記するんだけど、不安なので舞台装置のあちこちに書くわけです。ときどき共演者が見つけて、吹いたりします。以前、三木のり平先生とテレビで共演したときに、小道具にせりふが書いてあって、どうやって見るんですか？　って伺ったら、加藤君これはね、盗み見しちゃダメなんだよ。堂々と見ながら

言うんだよ。茶碗をこう手に取ってしげしげと中を見ながら言って、終ると今度はみかんとかを取って、何気なくこう見ながら言えばバレないんだよ、って。テレビにはいい方法だけど、でも僕らの芝居じゃなかなか応用できなくて、どうしても盗み見つばくなりますね」

あとで素子さんが、さすが、茶碗とみかんを使ったのり平さんの演技が目に見えるようだった、と名演に感じ入っていた。

加藤さんは後進の演技指導に当って、自身の体験を生かすことにしている。

「俳小の研究生だったころ、悲しい過去を思い出して泣け、とかいう授業があったんですよ。また上手に話して、上手に泣く子がいてね、男の子でも。しかし僕たち昭和二十四年生まれの男の子って、男は泣いてはいけないという教育を受けた世代だったので、人前で泣くなんて恥かしくてできなかった。それでうちの研究生にはそんなことはさせません。

父同様、役者になった長男の加藤義宗さんと加藤さん。



いつかはそういう表現をしなくちゃならないんだけど、最初からできるのがいいというものでもなくて、内に持ってるもののほうが大事。それがいつか、バーンと出るときがくる。無理に泣けって言わなくても、いいせりふといい演出に巡り会えば、自然に泣きますね」

俳小の卒業公演は『ピエール・パトラン先生』（作者不詳・フランス）で、加藤さんはそのタイトルロール。演出の早野寿郎は、親友の小沢昭一さんによれば「演劇史上もっと評価されていいやつだった」のに、残念ながら早逝した。

「早野先生の演出は、三歩行って振り返って……式の振り付ける演出でしたね。われわれ生徒はそれで人形のように動く。早野先生もプロの役者にはそんな演出は多分なさらなかったでしょう。僕も客演で来てもらった俳優さんにはなるべく任せてますけど、後輩たちには早野式に振り付ける演出です。彼らにそれで正解にはまったときのいい気持をつかん

でもらうというのが大事なんで、自分で自分の演技に感動する、何とも気持ちのいい瞬間があるんですよ。それを一回味わえば、ああこういうのが正解なんだ、とわかる。するとまたこの感じになればいいのかな、とそれが身体の中に残ってゆくんですよ」

加藤さんは本当に芝居が好きでたまらないらしい。次に上演する新しい作品を見つけるために、まるで子供が新しいおもちゃを物色するみたいにして読書に励む。原則として劇作家に書き下しの依頼はしない。でき上がって来た物が自分の意とすると異なる場合、困るから。作品はお客本位で選ぶのではなく、自分が本当に面白いと思える芝居を選ぶ。それで役者が舞台で輝けば、客席にそれが伝わる、と信じている。

「役者って楽しいですよ。ほかの仕事だったら多分何やっても飽きちゃうだろうな、と思う。僕は偶然役者になったようなものだけど、人間万事塞翁が馬で、まず入った会社がクビ

になって、次に俳小もつぶれて、それからつか劇団も解散して、そのときはいちいちショックでしたけど、それが結果的に幸いして、今につながったんですからね」

加藤さんの演劇に対する真摯な姿勢、真面目な取り組み方が爽やかだ。

「田舎のガキでしたからまわりには映画しなくて、裕次郎にあこがれたり、チャラチャラしたものでした。それが俳小で、早野さんがあるときおっしゃったんです。演劇というのは、芝居の女神の衣の裾に一瞬でもいいからふれようとして、ジャンプし続けるものなんだよ、って。そう言われてすごくびっくりして、あ、芝居には神様がいるんだ、って。そういうのが芸術家の仕事なんだ、って思ってたね。それ以来、今でもずっとそう思い続けているんです」

(この項終わり)

加藤健一事務所次回公演 音楽劇「詩人の恋」
10月25日(火) 30日 下北沢・本多劇場
問い合わせ 03・3557・0789

もし我^{われ}仏^{ほとけ}を得たらんに、十方^{じっぼう}の衆生^{しゅじやう}、至心^{しんじん}に信樂^{しんがく}して、我が国^{こく}に生^{しょう}ぜんと欲^{よく}して、乃至^{乃至}十念^{じゅうねん}せんに、もし生^{しょう}ぜずんば、正覺^{しょうがく}を取らじ。ただ五逆^{ごぎやく}と誹謗^{ひぼう}正法^{しやうぽう}とを除く。

『無量寿經』卷上 第十八念仏往生願

私が仏となる以上、「誰であれ」あらゆる世界に住むすべての人々がまことの心をもつて、深く私の誓いを信じ、私の国土に往生しようと願つて、少なくとも十遍、私の名を称^{とな}えたにもかかわらず、「万が一にも」往生しないというようなことがあるならば、「その間」私は仏となるわけにはいかない。ただし五逆罪を犯す者と、仏法を謗る者は除くこととする。

(浄土宗総合研究所編『現代語訳 浄土三部經』より)

誠を宿す

「おしちゃん、ごめんねえ。おしぼりじゃなくて、タオルなんだってね。娘に教えられちゃった。娘の方がばあーばのやること、よく見てたんだねえ」

長野市周辺では僧侶のことを親しみやら敬意やらを込めて「おしちゃん」あるいは「おっちゃん」と呼ぶ。「おしようさん」「おししようさん」あたりが入り交じっているのだろうか。はきはきした人なつっこい声の主はN子さんの一人娘。ばあーとは檀家のN子さんのことだ。この春、急逝された。まだ六十代だった。この日はN子さんの初盆だった。

葬儀は住職が執り行った。副住職の私は四十九日の法要を勤めた。暑くなりかけた六月中旬。私はN子さんの想い出を話した。お盆の想い出だ。

私がN子さんのお宅にお盆のお経に参上するのは、例年、八月十五日。たいてい夕刻、暗くなりかけてからだ。十五日は、朝から自転車です街地のお檀家を巡り、お盆のお経をあげる。N子さんのお宅を終えると、ひとつ走りして寺に戻り、あとは門前の三軒を残すのみという段取りになる。N子さんのお宅は、まさに胸突き八丁というところに当たる。

おしちゃんがお経を終えると冷蔵庫から冷やしたタオルを出す。それがN子さんの仕来りだ。もちろん炎天下のお盆のことだ。汗をかきながらお経をあげ

るおししゃんを氣遣い、多くのお宅が冷たいおしほりを出してくださる。でも美容師というお仕事柄か、N子さんのそれはひと手間分、趣向を凝らしていた。顔や腕の汗をぬぐうと、スーッと清涼感が広がっていくのだ。

商品名を出すのも何だが、そのタオルには、ハッカ油を含んだローションを含ませてあるという。汗の乾く間もまなく汗をかき、いよいよ胸突き八丁を迎えた身にとっては、これ以上のないご馳走である。N子さんは、そんな氣遣いのできる人だった。これからも、極楽の世界からそんな氣遣いを私たちに差し向けてくださるだろう。四十九日の法要の後、そう話をした。

さて、N子さんの初盆。嫁ぎ先から実家に帰り、はじめておししゃんを迎えるN子さんの一人娘は、私の話を憶えていたのだろう。亡き母と同じように、亡き母と同じタイミングでハッカ油入りのおしほりを出してくださった。亡き母を供養する思い、おししゃんを氣遣う思い、そんな思いを一つの形にする。母と同じことをして一つの形に表する。彼女なりの仕来りにしたかったのだろう。でも、おばあちゃん子だった彼女の娘に言われて一つ手抜かりに気が付いた。タオルではなく、普通のおしほりを用意していたのだ。

「ごめんねえ」と言われた理由が一瞬分からなかった。でも、そうかと、彼女

同様、N子さんの思いに気が付いた。

「おししゃん、朝からずーっと汗かきっぱなしなんでしょ。さあ、遠慮しないで、ごしごし汗をぬぐっておくれ、顔だって、腕だって、首筋だって、頭だって」ということだったんだ。だから、あえてタオルなんだ。おしほりより大きいタオルにしたんだ。それがN子さんの形、思いだったんだ。

形となった思いに誠が宿る。遅ればせながら気が付いた。

誠を宿すといえ、念仏もその一つだろう。南無阿弥陀仏とお称えする一つの形を通じて極楽往生を願う思いに誠を宿すのだ。でも、念仏には阿弥陀さまの誠も宿る。私たちが念仏を称えるのは阿弥陀さまの第十八念仏往生願に基づく。私たちが往生させたいと願う阿弥陀さまの思いが形になったのが、私たちの称える念仏である。念仏を称えることは阿弥陀さまの誠に出逢うことでもあるのだ。

N子さんの初盆。N子さんの誠を受け継ぐおしほりを見ながら、あらためて教えていただいた。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十六回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

ドイツに台頭する

「サーベル主義」を危ぶむ その二



ここで中尉の発言の背景について、若干、補足説明をしておこう。

遠い極東の日露の戦によってヨーロッパの情勢は大転換をせまられることになった。これも地政学の皮肉であった。すなわち日露戦争以前は、孤高を守るイギリスに対して、ロシアとフランスが同盟関係を結び、さらにドイツ・オーストリア・イタリアが同盟関係を結ぶという「三勢力鼎立」の状況にあった。しかし、かねてから冬期に結氷しない港を求めての「南進」を国策としてきたロシアは、日本に負けたことで、極東アジアでの南進を一時断念せざるをえなくなり、バルカン半島への南進に主力をふりむけることになった。これはロシアにとって、ドイツ・オーストリア両国との軍事的緊張を覚悟することであり、そのためロシアは宿敵イギリスと和解、フランスをくわえて英仏露の三国協商を結ぶ。こうしてヨーロッパの勢力地図が塗り替えられたことで、イギリスはそれまでの主

要仮想敵国をロシアからドイツに切り替え、ドイツはこれをうけてイギリスとの建艦競争に入っていくのである。

ちなみに、海旭が留学した一九〇〇年時点まで、ドイツ陸軍の常備兵力は六十万人であったのに対して、海軍のそれはわずか一万七千人にすぎなかった。ヨーロッパの軍事状況の大変化をうけて、皇帝ヴィルヘルム二世は「艦隊法」を通すと、海軍の増強に乗り出した。これによって、英仏露の三国協商成立後、ドイツ海軍は海旭が留学する以前からすると兵員数も艦船の総排水量も倍増させていたのである。

「ところで、諸君」と仮面の士官が皮肉たっぷりに言った。「たしか今晩は、今をときめく海軍の士官さまが飛び入りされると聞いているが、ずいぶんと遅いじゃないか。伝統あるわれら陸軍士官を待たせるとはいい度胸をしている」

前述したように、ドイツにあつては陸軍こ

そ伝統においても格式においても鉄血国家の守護であり華であった。予算でも兵員数でも圧倒していた。中尉たち若き陸軍士官たちからすると、われこそ伝統あるエリートで、海軍など陸軍に行けなかった「成り上がり」にすぎないという思いがあった。それがこの仮面士官の言葉尻にはつきりと表れていた。

何事ぞ

花見の人の長刀

夜会は開演の定刻になったらしく、楽隊が軽妙なワルツを奏ではじめた。仮面をかぶった士官がいらだちをつのらせて、「もう、これ以上待っておれん。さあ、諸君、海軍野郎はほうっておいて、われらをお待ちかねのご婦人たちのもとへ、ダンスのお相手をしに行こうではないか」と全員を誘った。

と、そこへ制服から海軍士官と知れる男が、汗をかきかき息せききって駆けつけてきた。中尉によると、仲間の某士官の遠縁とかで

呼びがかかったらしい。海軍軍服にサーベルをじゃらじゃらとならして、まさにおっとり刀で駆けつけたという風情で、仮装舞踏会にはなんとも場違いな^{ちんぱりしゃ}闊入者だった。遠縁の士官が仲間の手前はつが悪いと感じたのだらう、新参のサーベル海軍士官に「おい、遅れてきたうえに、なんだその野暮ななりは」と眉根をひそめた。

サーベル士官は多勢に無勢にひるむどころか、語気を荒げて言い返した。

「おぬしらこそ、なんだ、その軟弱ななりは。これからはユニオンジャックの艦隊と一戦まじえなければならんのだぞ。常在戦場——こうした慰安の場にあっても、戦時を忘れずの気概を服装においても示してこそ帝国軍人であろう。おぼえておるか、日露戦争開戦のみぎり、ロシア太平洋艦隊の母港であった旅順で海軍士官どもは、ちゃらちゃらとめかしこんで舞踏会にうつつをぬかしていたそうではないか。そんな軟弱海軍どもだから、ちっば

けな島国の猿に負けるようなことになったのだ」

「おい、言葉に気をつける。今晚はわれらがゲストに日本の学僧をお招きしているんだ」と中尉が海旭を示してたしなめるのを、サーベル士官は海旭に一瞥をくれただけで無視し続けた。

「それにだ、燕尾服に白ネクタイだけが正装ではないぞ。民間人ならいざしらず、これがドイツ帝国軍人のれっきとした正装だ。なにが野暮だ」

海旭は意味がわからず、答えを求めるように中尉の顔を覗くと、中尉は海軍士官が腰に吊るしているサーベルと腹に巻いている赤いカマーバンドを指差して、軍服にあれがあれば正装と認められるのだと小声で教えてくれた。

サーベル士官は給仕に大ジョッキを注文し、一息もつかずにのみほすと、ヒゲにたっぷりといった泡を手の甲でぬぐって「おっと、

わが小水タンクは早くも満タンだ。ちょいと放水をぶちかましてくるか」というなり、席を蹴ってトイレへと立っていった。

あっけに取られて言葉を失う一同に、海旭は苦笑をもらした。中尉が「なにがおかしいのだ」と尋ねるのに、海旭は答えた。「この場にぴったりの俳句——日本独特の短い詩を思いだしてね」

「ハイク？」と中尉は返した。「この間千本スミレを絵に描いて、それに添えてくれたあの日本の短詩か。ワタナベ、どういうハイクかおしえてくれたまえ」

「何事ぞ 花見の人の 長刀」

と海旭は向井去来の句を紹介して、どこまで理解してもらえるか自信はなかったが、次のように説明を加えた。

「花見に武士がやってきたが、長い刀をさしている、ああ風流を解さない、なんと野暮な輩だろう、と日頃威張り腐っている武士を庶民があざわらって溜飲をさげているのです」

説明を聞き終えた中尉たちは、一同顔をみあわせて、腹をかかえて笑いつつあった。

「最近、あの手の野暮天士官が増えている。困ったものだ。それもこれも海軍の増強を急ぐあまりのことではなからうか」と中尉が言うのに、海旭は「表」からでは見えないドイツ軍内部の危うい亀裂を垣間見たのだった。やがてサーベル士官が厠から戻ってきた。招かれざる客と思われていることなど露も気づかず、二杯目のビールを注文すると、これまた一氣に飲み干して、大声でまくしたてはじめた。

「おぬしら陸軍は本気でイギリスと戦う気があるのか、だいたいお前らが本氣になつていないから、庶民も、やれ軍拡は庶民の膏血をしぼってけしからんの、そしてこれを左翼の社会民主党の連中がたきつける。こんなことをしていたら、イギリスとの軍拡競争に敗けてしまい、わがプロシアも日本にやられたロシアの二の舞になってしまうぞ」

陸軍士官たちは、一様にうんざりした顔をしてみせたが、サーベル士官には通じそうになかった。楽隊は一曲を弾き終わり、次の曲にかかろうとしていた。フロアの中央へ男女のカップルが集まりはじめた。

と、仮面の士官が海旭に言った。「野暮な議論はこのへんにしたらどうだ。せっかく一張羅に身をかためてきたのだから、わが妹と踊らんかね。気恥ずかしければ、この仮面をかしてやろう」

海旭は顔を赤くし両手を振って断わりながら言った。「かわりに、この海軍士官殿の酒と議論のお相手をしよう」

野暮天サーベル士官が応じた。「望むところだ。軟弱なる陸軍諸君らは、ダンスを楽しんできたまえ。異国からの客人のお相手は俺がしようじゃないか」

さっそく給仕をよぶと大ジョッキを二杯注文。舞踏会のなかで日独麦酒大合戦がはじまった。二人はこんなやりとりをしながら盃を

重ねた。

「まったく庶民ときたら、いい気なものだ。われらが国を支えているというのに、軍部を目の敵にする」(海軍士官)

「庶民いじめの軍拡はいかがなものか。結果として国を滅ぼすことになる」(海旭)

「おぬし、坊主のくせに社会党と労働組合の回し者か」(海軍士官)

「いえ、弱いものの味方です」(海旭)

二人の論戦は甲論乙駁を繰り返しながらとどまりそうになかったが、三時を回ったころ、ついに日本の僧侶に軍配が上がった。予想を裏切ってサーベル士官が酔って卓につぶしてしまったのだ。ダンスから戻ってきた陸軍士官たちがこれを見届けて歓声をあげた。

「おや、おや、海軍殿も口ほどでもない」
「坊さんもなかなかやるじゃないか」と彼らが口々に言うのへ、海旭はこう受けた。

「なんの、なんの。酒はサーベルよりも強し、いや酒つき説法はサーベルよりも強しかな」

海旭は酔いが回った朦朧たる頭で、ドイツの軍人の一部に勃興しつつある危ういサーベル主義を嗅ぎ取って、ドイツを手本にしてきた日本もあぶないのではないかと漠たる不安を抱いたのだった。

新聞書評等で

絶賛発売中!

紫雲の人
渡辺海旭
壺中に月を求めて



今、日本にはこの破天荒なひたむきさが求められている

この人を見よ!

巖石と同時代に欧州に学び、
仏教を革新し、社会事業と教育を興し、
アジアの独立運動を輔け、近代日本を
変えようとした快僧の物語。

著 渡辺 啓

定価3990円(本体十税)ポット出版

法然上人を歩く

二十五霊場二十一番

高橋良和著『法然上人紀行』(探究社)より抜粋

京都大原

勝林院

昔は桜か、紅葉のころしか訪れなかった洛北三千院のあたりは、このごろでは年中人々の訪れるところとなり、三千院の門前は日曜日など長蛇の列をつくっている。自動車でいくとそれぞれの駐車場でその経営者が手をあげて呼び込みに忙しい。

その三千院の門に入る手前を流れる川を呂川といい、同院の門を通りすぎたいわゆる北側を流れる川を律川という。ともに三千院の東の方の山の中の音無の滝から二分して流れているので、この二つの川を呂川律川と呼ぶ。よくいうことであるが、呂律がまわらぬと

いうことはこの二つの川のことをいうので、いづれも天台声明に因んだ名前である。この三千院のあたりがいわゆる昔の大原寺と称し、天台声明の源流の地で魚山といわれている。その大原寺には隆盛のときには四十九の寺があったが、その一つに勝林院がある。こゝは三千院の門前を通り後鳥羽、順徳両天皇の御陵を通ったつきあたりである。

勝林院は昔比叡山延暦寺の別院で、慈覚大師の開創の寺であり、法然に縁りの大原問答のあったところである。

本尊の阿弥陀如来を証拠の阿弥陀という。それは寛仁年間に寂源上人が天台の学者を招いて法華八講を修したとき、覚超、偏救の二僧が仏果の空、不空で争ったときに、この本尊が覚超が不空を主張すると、本尊が姿を隠し、偏救が空を説くと、その姿をあらわしたというので証拠の阿弥陀とも呼んだようである。

この里は昔から比叡山の隠遁者たちの集まったところであった。それは若狭、越前、すなわち、福井県に向う要路の場所であったからでもある。

法然はこの勝林院に足をはこんだのは、おそらく一生一度の劇的な討論会だけに相当な用意があったことと想像される。

もちろん我々の如き不勉強の輩でないから、ことさら書物をひもとき、頭を整理する必要のない方であることは、百も承知している

が、然し公開討論会とあればこの里への足の運びにも真剣そのものであっただろうと失礼ながら想像するのである。

今のように大原は開けていなかった。比叡をくだってこの勝林院に向う法然は、五十四歳、一方の顕真は二つ上の五十六歳、ともに円熟の二人である。

丈六の仏像の両側に座すこの二人の僧、もちろん、そのうしろには、天台の荒法師もいたであろう、浄土の求道僧もいたであろう。

東大寺の大勸進職であった俊乗房重源も、弟子三十余人をつれてこの会座につらなっている。まさに緊張のひとつきであつただろう。

そのとき法然の弟子である熊谷蓮生は、師である法然にもしものことがあつてはと心配のあまり、鉈をもつてこの会座につらなっていたらしい。

というのは、法然の念仏に共感をもった顕真が、問答が終ったあと、座を立て、この丈六の本尊の前を行道する先進をつとめたとき、熊谷蓮生はもっていた鉈を、そのお堂のうしろの竹藪に捨てたらしい。

それが今でも残っているので、鉈捨ての藪というのがある。この問答のあと念仏して行道する法然と、顕真、それに

参列の僧侶の念仏の声が、山谷にみち溢れたといわれている。

然しこの大原問答の際におもしろいことがある。というのは天台宗の資料のなかに、大原問答の際に、顕真と法然とが問答したというが、少なくとも当時の天台座主である顕真が、山をくだった法然と問答したのではなく審判の役目をしたのであるという説があるということを知りたし、また大原問答の一年前に一度リハーサルをやったという文献があることを聞いているが、これはどうしても調査してみたい。

この勝林院に参詣して、本堂の丈六の阿弥陀如来を拝み、ふとその脇をみると、問答台が残っている。この台の上に登った二人の僧の姿が想像されるのである。念仏の奥義をのべる法然の眼ざしはうちふるえていたかもしれない。

勝ち、負けの判定ではなくとも、この問答で法然の念仏がそのとき、根底からくつがえされたようなことがあれば、浄土宗はどうなっていたであろうか。法然の姿をこの問答台の上に想いうかべてみたのである。

色づいた紅葉の木々を通して、かすかに念仏の声が流れてくるような感じさえうけた。

「法然上人をめぐる人々」

師
を慕う

親
鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第四回

法然上人と都のようすを伝え終えて——

十

法然上人と都のようすを伝え終えて、ひと月ぶりのわが家へ善太郎が帰っていくと、親鸞は恵信を開炉裏に招いた。

「恵信」

と親鸞は妻に呼びかけた。

「師僧からは、そなたと子供たちのことまでお言葉をいただいたそうだ」

「善太郎が話すのを、わたくしも土間で漏れ聞いておりました。真実勿体ない御心でございます」

「そなたと所帯をもって以来、特に話し合うこともなく今日まで来てしまったが、天台僧を目標して叡山に登ったわたしが、法然上人様の弟子となった……」

深い感慨が親鸞を襲っていた。

「振り返れば長い旅路であった」
つぶやくように親鸞は言った。

「今宵はかかることが思い出されてならぬ。」

叡山で迷いに迷った二十年の後、法然上人様に出会ったのだ」

「わたくしにとっても、今日までまことに思いがけぬ旅路でございました。玉日様の侍女でありましたわたくしが、玉日様御亡き後を継いで、殿と日々の暮らしを共にさせていただくことになるとは、どうして思いがけましたろう」

「まことにのう」

親鸞は深く頷いた。

「すべては、如来の不可思議な御導きであった。すべては、いかに修行しても悟れぬ叡山堂僧の日々から始ったのだ」

親鸞は嘆息した。

「いや」

彼は急いで付け足した。

「聖徳太子が開基された六角堂に、百日籠って太子の導きを祈った日々が始ったのだ」

「そのことはわたくしも、嘗て玉日様から伺ったことがございました」

遠くを見つめる眼差しになって親鸞はつづけた。

「六角堂でわたしは救世観音の示現を得て、法然上人の弟子となった。すべてはあの示現を得た時に始まっている」

「……」

「玉日と結ばれたのも、そなたと結ばれたのも、すべては六角堂に籠った日に始った。あの時、六角堂に籠らなければ、示現を得ることも、法然上人にめぐり合うこともなかったのもとより、そなたと暮らすこともなかったのだ」

言葉を切ると、親鸞はふたたび嘆息して、「道に迷う叡山の堂僧範宴（はんえん）（叡山時代の親鸞の出家名）はどうなっていたであろう」

隙間風に、灯火が揺れた。ジジッと油が燃えるかすかな音がした。灯火の影にこもこも語り合う親鸞と恵信の姿があった。

隣室の三人の幼い子ども達はみな寝入っている。

静かな雪の夜が更けていった。

夫婦として互いに向き合い、二人が歩いてきた道を語り合うのは、その夜がはじめてであった。

十一

承安三年（1173）に生まれた親鸞が、出家するべく青蓮院（しょうれんいん）の慈円僧正の白川房に入室、範宴中納言公と名乗って慈円の童子となり、仏の教を学ぶことになったのは治承5年（1181）。九歳の時であった。

親鸞の父は皇太后（藤原忻子か）宮大進の職にあった下級貴族の日野有範。

母が誰であるか、従来不詳とされていたが、源氏の出身で源義家の孫娘・貴光女ではなかったかという最近の研究がある。

白川房にいた範宴（親鸞）が比叡山に登頂、受戒して正式な天台僧となったのは十五、十六歳であったろう。

受戒した範宴は天台の奥義を学ぶとともに、

法相三論をはじめ仏教諸学の奥義をその宗派の碩学から学び、さらに横川^{よかわ}の常行三昧堂僧となって修行に明け暮れることになった。

しかし彼は修行一途に心を集中させることができなかった。時として、そしてしばしば目にするのは童子を寵愛し、女と遊ぶ僧たちの姿である。おぞましいと思いつつ、僧侶のそんな姿を目にすると、若い範宴のからだにも激しい欲望が目覚めてくる。

範宴は戒律を守り抜きたかった。しかし、そんな己の現実に気付いてくると、このまま長い将来、戒を守り通して清僧の生涯を生き通すことが果たしてできるかどうか、時として深い不安に彼は襲われた。

天皇家の人々や貴族たちに授戒するため、叡山高僧の供をして彼らの邸に赴くことも、範宴には誘惑の機会となっていた。そこで目にするものは俗世の栄華であり権謀であり、男と女の姿である。

受戒と俗世の幸福と。人々は適当に折り合

いをつけて生きていたのであった。

仏が真によしとされる生とは、どういう生であるのだろう。

受戒僧として生き抜く自信が揺らぐとき、ふと範宴の思念に、今ちまたで評判だという法然上人のみ教えいうものが浮かぶようになっていた。

（そういえば、お上人は学徳叡山第一といわれる僧であつたと聞くが、山を下り、天台とは別の教えを説いているそうな）

（仏の道には出家在家の区別はなく、ただ一心に念仏を称えることによってこそ、衆生等しく弥陀の救いに与れるとか…）

しかし山を下り、天台とは別の教えを聴聞してみようという決心も、範宴にはなかなかつかなかった。

閑々の日々を送っている彼が、いつしか聖徳太子の生涯を思い浮かべるようになったのは自然のことであつたろう。

（在家の人として生きた太子は、利他の生涯



を全うされた仏教者であった。出家しても名ばかり。色欲に溺れ、破戒を重ねる人生と、在家であっても利他に捧げられた生涯と、真実、私はどちらをよしとされるのか。太子は法然上人の教えとかいうものを、遠の昔に生きた方ではなかったか

十二

「叡山にいた日々、わたしにもっとも切実な問題は……」

性に関わることであった、と言おうとして親鸞は口を噤んだ。相手が妻であっても、さすがに口にできなかった。

眸をあげて、恵信は夫の次のことばを待っている。

親鸞は妻の眸から目を逸らせると、

「道に迷っていたのに、わたしはぐずぐずして、敢然と別の道に踏み出せないでいた。その昔、わたしの寿命は二十九歳で尽きるといわれたことがあったが、遂に命尽きるその二

十九歳を、叡山で迷いの中で迎えることになってしまった」

「磯長の聖徳太子靈廟に参籠されたときの夢告でございましょう。十九歳の殿の余命はあと十年。二十九歳で尽きるお命だという夢をご覧になったとか」

「そうだ、その夢は何かの折に心に甦っていた。天台僧として確信をもって生きることができないわたしが。叡山で死に、天台僧として葬られるとすれば、それは天台に対する冒瀆ではないか。二十九歳が近づくにつれわたしの心は落ち着かなかった。今一度聖徳太子にこの範宴の行く道をお示しいただくことはできないだろうか。太子ゆかりの六角堂に百日籠る決心をしたことのうちには、わたしの生死が係っていた」

生死が係ったその堂籠りはたしかに如来に、聖徳太子に、届いたのであった。

六角堂に籠って九十五日目の暁、範宴の夢に救世観音の化身聖徳太子が文書を結んで示

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018012245231

現。戒律と性の狭間で苦しむ範宴にとつてそれは太子が与えた大きな回答と思われた。

避けられない報いによって、修行者がたとえ女犯を犯したとしても、私は玉のような女となつて犯され、一生の間よく莊嚴し、臨終に際しては極楽へ導こう。

これは私の誓願である。範宴よ、この誓願を広く一切衆生に広く説き聞かせよ。

「眼が覚めたと思った時、ハッとわたしの心に落ちてきたのは『法然上人』という御名であった。そのときすでに、叡山はわたしの心

にはなかった」

法然上人であれば示現のことばを分かつてもらえるのではないかと範宴には思われた。百日にはまだ五日足りなかったが、起き上がると彼はすぐ吉水に向かい、法然上人の弟子となることを願い出た。

(日々開かれるお上人様のみ教えを聴聞しよう。百日続けるのだ) 範宴は決意した。

「六角堂は九十五日であつたが、吉水には一日も欠かさず百日あの坂を上った。百日、坂を上り、浄土の教えを聴き、尊いみ顔を仰いだ」

と、親鸞は言った。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●法

〔特選〕
法事終え祖母がすすめる心太

浜口 佳春

法事が済んで、お参りに来てくれている人に心太が出た。天草を採って干すところから手を入れた、特製のしろものに違いない。それを読み取るのは「祖母がすすめる」と、作者が海辺の人だからである。

〔佳作〕白蓮の雨となりたる法会かな

河合富美枝

めまといを払いて父の法事かな

工藤 掉

法廷の緊張ゆらぐ団扇かな

石原 新

●人

〔特選〕
人が来てやがて夜店となりにけり

紺野 敬

夕方近くまではごく普通の街並みなのが、人が来て何かごとごとしている。幾つかの屋台ができる、日も暮れてくる。通りは次第

ににぎわってくる。こうしたことが毎日繰り返される、そういう街なのだろう。

〈佳作〉

梅雨湿りして人形の下半身

斉田 仁

人影の急に途絶えて夏の昼

佐藤 雅子

一人居の昼は山菜混ぜ御飯

山口 信子

●自由題

〈特選〉

下駄の先とんとん突いて浴衣の子

佐藤 ゆう

夏になつてはじめて浴衣を着て出るのだから。新しい下駄で鼻緒がきつく、殊に前緒が指をこばむ。「とんとん突いて」が履いてから出るまでのしぐさを、うまくとらえていると思う。祭りでもあるのだろうか。

〈佳作〉

枇杷洗う水の明るき夕べかな

村田 篠

逃げ水の彼方へ父のオートバイ

長谷川 裕

祭りみこし葉缶の水をまわし飲む

中村 真一



誌上句会〈編集部選〉

■法

あかつきや法螺の音入れて夏の山
妙法のかがり火光る京五山
夏の寺ひとり法事をする男
バナナ食う法人名で呼ばれつつ
羅の法衣疊んで一切空
法学者めきて巻きつくクレマチス
方法序説そしてさみしき百日紅
法医学教室出れば月涼し

■人

人波を抜けて小袖に秋の風
人影の急に途絶えて夏の昼

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇一一年十月二十日

発表・『浄土』二〇一一年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

古語自由題

兼題

季語ではありません

人は人我は我なり夏の果て
人の死に遠く灯りし花石榴
炎昼や墨を流したような人
滝見上ぐ人はおおもむね無口なり
涼しさや人馬が転ぶ時代劇
夏草の人のかたちに沈みけり
緑陰は無人白シャツのみ乾く

■自由題

施餓鬼会や夏蝶三羽蜜を吸う
念仏の結ぶ絆で墓参り
青鳩の去りし渚や虎が雨
くちなわの横這うており盆の墓
本堂の涼風年忌一覽表
紫陽花のひれ伏している真昼かな
緑陰に入りて貴族の歩幅かな
夕立は御徒町より向う側
土曜日の西瓜倒せば横縞に
万緑を斜めに進む白日傘
豆腐屋であつた硝子戸明易し
教会の白き扉へ揚羽蝶
千僧の読経に負けず蟬時雨

森 懷人
鳥羽 梓
村松芳郎
三宅月彦
植田規夫
井口吾郎
鍋谷宗治
飯島英徳
中御門日名子
河合富美枝
佐藤雅子
斉田 仁
鈴木真理子
工藤 掉
井口吾郎
笠井亞子
村松芳郎
小林苑を
小林暢夫
鍋谷宗治

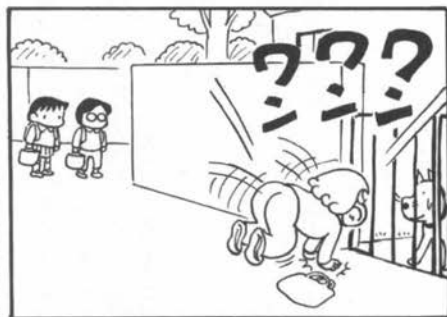
84 さっちゃんねネッ

かい目

かまち♡ふいろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞 以上夕刊)



編集後記

窓の雨だけがめいる台風下

岱潤

八月の三十一日、総本山知恩院で「念仏結集布教大会」が開催された。

これはたぶん歴史的にも初めての試みで、浄土宗のすべての大本山、総本山の布教師会会員が一堂に会し、まる一日『祖師報恩—未来につなぐお念仏』のテーマのもと、各大本山・総本山の布教師会会長様の法話を次々に拝聴しながら、間を別時念仏でつなぐという、正に八百

年大遠忌にふさわしい催しであった。会長様の中に一人『一枚起請文』の最後の御文を取り上げた方がいらした。いわゆる「邪義」である。法然上人は何

を「邪義」とされたか。この方は往生を願う心以外すべてを邪義だと言われた。「ありがた念仏」も、「お願い念仏」もすべて「邪義」だと強調された。大変強い口調の法話であった。

その話を聞いていた私の後ろの在家の方が、「気楽に念仏しちゃいけないのかな」と、不安げに話されていた。私も法然上人はもつとおおらか（現在の意味で）ではなかっただろうかと思う。むしろ「たとい余事をいとなむとも、念仏を申し申し、これをする思いをなせ」とつねに仰せられる御詞の中でおっしゃっている。いろいろな思いのままお念仏することを否定されていない。生野善応先

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

生もその著書の中で、「南無阿弥陀仏の南無は、こんにちは、お願いします、ありがたう、などすべての意味を含む」とおっしゃっている。
念仏は気楽に唱えたいと思う。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十七巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年九月二十日

発行 平成二十三年十月一日

発行人

編集人

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七
FAX 〇三(三三七八)七〇三六

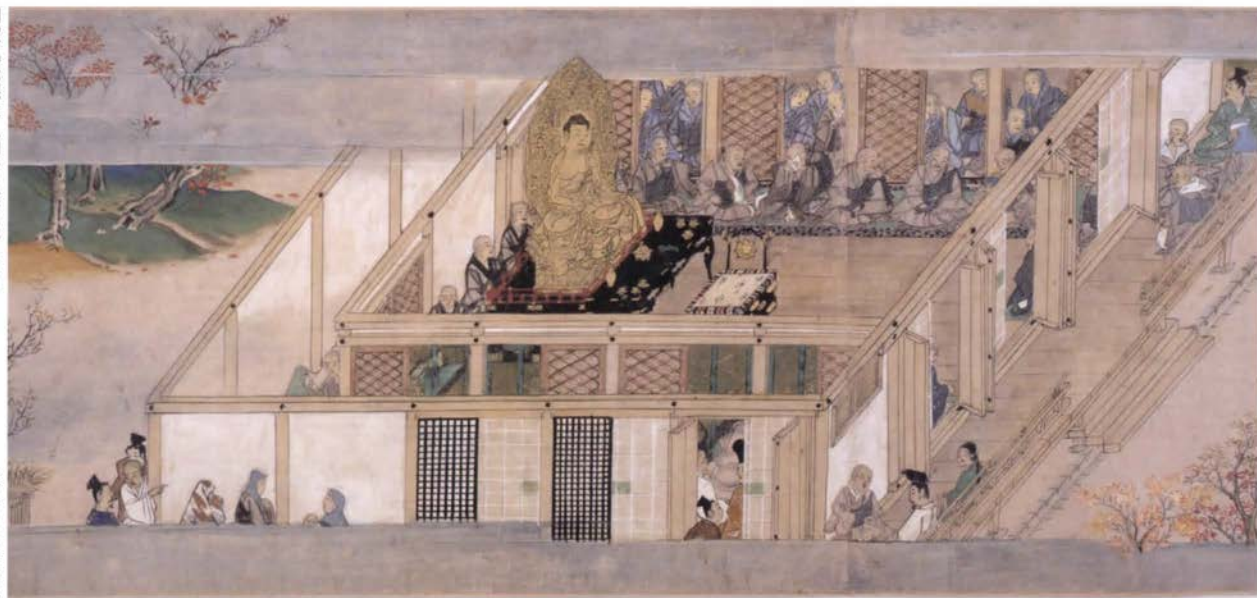
振替 〇〇八〇・八・八二八七

京都大原勝林院

勝林院は、文治2年（1186）秋、法然上人54歳の時、天台の大学者顕真法印けんしんぼういんの要請によって、南都北嶺の多数の名僧学匠なんとほくれいが、お念仏の法門について談義した、いわゆる「大原問答」がおおはらもんどう開かれたお寺です。一日一夜の談義の後、顕真法印は上人の教えに感嘆し、自ら先頭に立って多くの僧ととも

もに三日三夜念仏行道し、その声は山谷に満ち林野に響き渡ったと言われます。法然上人の教えが広く伝わる契機となり、浄土宗にとって因縁の深い聖地です。

国宝「法然上人四十八巻伝」より



総本山知恩院蔵

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう

600円(税別)



完売

月刊『浄土』 バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠一巻本」より